

*** アーカイブ室最初のオーラルヒストリーインタビュー –藤田良雄先生–**

2008年4月、国立天文台天文情報センターにアーカイブ室が置かれ、歴史的価値のある天文学に関わる資料の発掘、復元、保存、整理、活用、公開を進めている。その活動の一環としてオーラルヒストリーも重要との認識で進めていこうとしていた。このたびその第1弾として6月18日に101歳になられた藤田良雄先生(1908年9月28日生まれ～)をお訪ねし、インタビューを行った。筆者が最初に藤田先生にお目にかかったのは、おそらく1961年、岡山天体物理観測所であったろう、まだ正式な観測が始まっていなかった岡山天体物理観測所に設置された当時世界で7番目に大きかった188cm望遠鏡の試験観測中に観測においでになった時である。当時先生は53歳であったと思う。その後何度も岡山天体物理観測所に観測に来られ、いろいろな思い出のある先生であった。

今回はアーカイブ室として初めてのオーラルヒストリーのインタビューであり、インタビュアーはアーカイブ室の応援をしてくれている若手の専門家をお願いした。インタビューの内容はインタビュアーがまとめるので、ここでは新聞としての速報にとどめる。先生の御自宅は多摩市連光寺の高台にあり、天気良ければ素晴らしい眺望のお宅であった。特に冬は富士山を望む景色が素晴らしいということで、応接テーブルの上には見える丹沢連峰の山々の名前がスケッチに書き込まれていた。1970年に連光寺に引っ越して来て40年ということであった。

インタビューに際して、カメラは専門家をお願いし、我々が到着したときにはすでにカメラがセットしてあった。先生は2006年12月に足を痛められ歩くのが多少不自由になられたようだが、筆者がSolar-B(打ち上げ成功で「ひので」と命名)の仕事で宇宙研に通っていた頃、御自宅からかなり距離のあるところを散歩されているのをお見かけしたこともあった。移動には同居の息子さんの手助けが必要な様子であったが、多少耳が遠くなられたようだがまだまだお元気であった。

先生はすでに何度もこういったインタビューに答えているし、経歴、業績は明らかであるから、インタビューもなかなか難しいと思われた。質問に対して息子さんに通訳しろというような場面もあった。

先生は、日本の観測天文学の開拓者のような立場であったろうと思われる。日本には太陽分光観測を除いて本格的な分光ができる望遠鏡がなく外国の望遠鏡に頼らざるを得なかった時代、先生は昭和25年(1950年)アメリカのリック天文台に行かれ91cm屈折望遠鏡で3カ月、ヤーキス天文台の102cm屈折望遠鏡で9カ月とアメリカでほぼ1年間観測の経験を積まれた。このアメリカでの大きな望遠鏡を使った観測は、当時の東京天文台長萩原雄祐氏から、大きな望遠鏡の扱いを勉強して来いと言われ、勇気づけられたとおっしゃってい

た。このアメリカ滞在から帰国した時期が岡山天体物理観測所の 188cm 望遠鏡建設計画の議論が始まっていた頃であった。

さて、今回のインタビューでどんな新しいことが伺えたであろうか、楽しみにしていただきたい。筆者が質問した事項の中に、先生が組上げを行った塔望遠鏡は 65cm 屈折望遠鏡とともに、世界第 1 次大戦でドイツに対して戦勝国であった日本が要求した賠償金の物納であったという話の真偽についてお訪ねしたところ、先生は確かにそういう話は聞いたことがあります、証拠はありませんね、と話された。

写真 1 は、今回のインタビュー時の元気な先生のお姿である。



写真 1 インタビューに答えられる藤田先生